

大学生の生活空間構造と大学文化への社会・文化適応¹

— 生活体制は教養課程取得単位数をどう予測するか —

Lifespace Structures of University Students and Socio-cultural Adjustment to University Culture

: From what life structures could the number of credits for general
education course be predicted ?

弘前大学保健管理センター 豊嶋秋彦

(1988. 6. 20 受理)

I 問題の布置

1. 大学への適応の指標としての取得単位数の意味
2. 留年研究との接点

II 方法

III 入学直後の生活体制による予測

IV 入学3ヶ月後(夏休み直前)の生活体制による予測

V 1年次終了時点(期末試験直前)の生活体制による予測

VI 総合的考察

結 び

付・資料 入学3ヶ月後調査の変数一覧

I 問題の布置

昭和52年度以来の「大学新入生における適応状況と適応過程」¹⁾「大学生の適応に関する基礎的研究」²⁾と名付けられた我々の研究プロジェクトは、大学生の主観的な適応感を規定するその時点の生活体制、即ち「適応構造」と、大学生の主観的適応感に関連する先行時点での生活体制、即ち「適応感の予測因」とを、追跡法による質問紙調査のデータによって解明しようとしたものであった。

1. 本研究の原資料は昭和59～61年度文部省科学研究費の補助(一般研究・C 59510040)による研究プロジェクトによってえられたものであり、III・IV・V章と類似の分析はそれぞれ、第24回全国大学保健管理研究会(1986, 豊嶋・細川・芳野・清, 同報告書 125頁), 第53回日本応用心理学会(1986, 豊嶋・細川, 同論文集 101頁), 第8回大学精神衛生研究会(1987, 豊嶋, 同報告書 55～60頁)で第1次の発表をしたが、今回は、分析対象のパネル及び変数を変えて再分析し、それに、I章の指標に関する考察とV章の通時的考察を加えたものである。当該プロジェクトと第1次発表の共同研究者の労をとられた、現東北大学医療技術短期大学部・細川 徹助教授、弘前大学教養部・芳野晴男教授、同教育学部・清 俊夫助教授に感謝申し上げたい。

しかし、これまでの我々の研究には、大学生の大学文化に対する適応、即ち大学生の大学適応と、主観的適応感や生活体制との関連を明らかにする視点が欠落していた。そこで昭和59年度の入学生に対して、従来と同じく1年次3回の質問紙調査に加え、1年次の取得単位数調査を公式記録によって行ない、大学適応と主観的適応や生活体制との間の関連を探ることを本稿の目的とする。これは昭和59年度から3年間展開した研究プロジェクト「大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究」(豊嶋 1987)における下位課題のひとつ(「人格適応の構造と大学における社会適応の関連性の探索」)に対応している。

なお本稿の対象者である昭和59年度入学生は、我々の意図せざるところではあったが、昭和62年度から転変絶えない国公立大学入試制度試行錯誤の影響をまったく受けておらず、しかも昭和54年度の「共通一次」「国立大学1・2期校制の廃止」という入試制度の激変からも遠い時代の学生であったという意味で、入試文化・進路選択文化の安定期の学生としての特徴をもつといえる。入試文化の変動によって学生の適応もまた変化することは、全国学生相談研究会議においてしばしば指摘されており³⁾、我々(豊嶋・清 1980, 1983. 豊嶋 1984, 1985)の同会議での報告も含めた中間総括は既に下田(1983)によってなされている。

1. 大学への適応の指標としての取得単位数の意味

近年、大学がいかにか「レジャーセンター」(石井 1981)に化し大学生活を享受する文化が浸透し、特に教養部期に著しいが学業からのモラトリアム空間に化しつつある(田中 1983, 豊嶋ほか 1981)とはいえ、少なくとも国立大学の場合、大学の制度的な中枢的規範は「教養」を含む学業修得におかれる。学生の側もまた学業の比重に相違はあっても個人の規範のひとつとしてそれを内化しているであろう。この仮説を検証するために、本報告の対象コホートたる昭和59年度の弘前大学入学生が学業を彼等の生活空間構造にどう位置づけているかを、入学直後質問紙調査と1年終了時(期末試験直前)質問紙調査における学生生活の目標や傾注対象を問う自由記述式設問への回答で吟味してみる。入学直後データは表1に、1年終了時データは表2に示した。有効資料数は前者で799, 全入学者の74.0%, 後者で651, 全入学者の60.3%にあたる。表中()は有効資料数に対する%である。表の1)は「大学にはいったらぜひやりたいと思っていたことは何ですか」という設問によって扱えた。「出席・試験勉強」というカテゴリーは、単位取得や進級を記述した場合もこれに含まれるが、広義の学業達成行動と我々は考えている。「学業自体」というカテゴリーには、1年次で既に専攻研究を記述する事例や、教養部期において学業以外の所謂「教養」「社会勉強」を記述する事例も含めてある。〈教養〉部が設置されている制度的意味が「教養修得」にあると考えるからである。この2カテゴリーが学業達成行動といえよう。以下の「生き方～」と「就職」は青年期後期の発達課題という意味で括った。次の「サークル」から「他」までの6カテゴリーは私的informalな活動になる。

表1・2からは、第一に、学部期(弘前大学では医学部生を除き2年次から学部に移籍される)の傾注希望活動としては学業が記述されやすい(表1・3)の2カテゴリー計で64.3%, 表2・7)「第一位」の2カテゴリー計で59.8%)こと、第二に、それに対して1年次に関しては、入学直後の傾注希望活動として学業を挙げる者の比率(表1・2)「第一位」の2カテゴリー計で45.3%)は、「サ

表1 入学直後における目標活動と傾注希望活動 (N = 799)

項目 カテゴリー	1) 大学での 目標活動	2) 1年次に最も力をいれたい活動			3) 学部期の 最も力
		第一位	第二位	第三位	
出席・試験勉強	7 (0.9)	88 (11.0)	22 (2.8)	7 (0.9)	15 (1.9)
学業自体	172 (21.5)	274 (34.3)	172 (21.5)	87 (10.9)	499 (62.5)
生き方・自己を考える	49 (6.1)	32 (4.0)	32 (4.0)	29 (3.6)	20 (2.5)
就職準備	0 (—)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	41 (5.1)
サークル活動	171 (21.4)	81 (10.1)	110 (13.8)	82 (10.3)	9 (1.1)
交友	35 (4.4)	129 (16.1)	142 (17.8)	63 (7.9)	22 (2.8)
趣味・遊び	129 (16.1)	40 (5.0)	48 (6.0)	68 (8.5)	12 (1.5)
なれること	2 (0.3)	7 (8.8)	2 (0.3)	9 (1.1)	3 (0.4)
アルバイト	23 (2.9)	2 (0.3)	10 (1.3)	20 (2.5)	0 (—)
他	30 (3.8)	13 (1.6)	17 (2.1)	16 (2.0)	12 (1.5)
なし	158 (19.8)	114 (14.3)	160 (20.0)	239 (23.9)	98 (12.3)
無答	23 (2.9)	19 (2.4)	84 (10.5)	179 (22.4)	68 (8.5)

()内は%

表2 1年次終了直前における傾注の総括と傾注希望活動 (N = 651)

項目 カテゴリー	4) 1年間、最も力をいれた活動			5) 力をいれたかったができなかった活動	6) 今、最も力をいれている活動	7) 次年度に最も力をいれたい活動		
	第一位	第二位	第三位			第一位	第二位	第三位
出席・試験勉強	13(2.0)	9(1.4)	6(0.9)	4(0.6)	184(28.3)	17(2.6)	5(0.8)	2(0.3)
学業自体	44(6.8)	79(12.1)	91(14.0)	182(28.0)	81(12.4)	372(57.1)	93(14.3)	36(5.5)
生き方・自己を考える	21(3.2)	31(4.8)	18(2.8)	42(6.5)	28(4.3)	16(2.5)	23(3.5)	30(4.6)
就職準備	0(—)	0(—)	0(—)	0(—)	0(—)	9(1.4)	8(1.2)	3(0.5)
サークル活動	172(26.4)	106(16.3)	39(6.0)	57(8.8)	68(10.4)	39(6.0)	116(17.8)	59(9.1)
交友	176(27.0)	77(11.8)	18(2.8)	16(2.5)	30(4.6)	46(7.1)	99(15.2)	65(10.0)
趣味・遊び	65(10.0)	65(10.0)	54(8.3)	32(4.9)	36(5.5)	27(4.1)	60(9.2)	54(8.3)
なれること	10(1.5)	9(1.4)	3(0.5)	1(0.2)	2(0.3)	2(0.3)	4(0.6)	4(0.6)
アルバイト	20(3.1)	26(4.0)	16(2.5)	23(3.5)	14(2.2)	7(1.1)	24(3.7)	47(7.2)
他	9(1.4)	10(1.5)	11(1.7)	12(1.8)	7(1.1)	14(2.2)	7(1.1)	14(2.2)
なし	116(17.8)	187(28.7)	265(40.7)	255(39.2)	167(25.7)	17(2.6)	108(16.6)	166(25.5)
無答	5(0.8)	52(8.0)	130(20.0)	27(4.1)	34(5.2)	31(4.8)	104(16.0)	171(26.3)

()内は%

「一時的活動」以下のインフォーマル活動6カテゴリー計の数値(34.0%)に比べ決して多くなく、1年終了時に総括させた1年間の傾注活動になると更に低下し僅か8.8%の者しか学業をあげない(表2・4)「第一位」)こと、第三に、1年終了時の総括(4)「第一位」～「第三位」)によれば、傾注対象を特定できない消極的モラトリアム乃至は同一性拡散を疑わせる学生も多いこと、などが読みとれる。これらは、教養部を学業以外に傾注して学部期を学業に傾注する、という、学生としての生活段階の進行に応じて傾注対象を変えていく「わりきり現象」(豊嶋ほか 1981)の存在や、1年次学生にとっての学業が、表2の6)にみる通り試験直前になってはじめて傾注される、自我周遍的活動にとどまることを一面で示している。

しかし、これらの諸項目のひとつにでも学業達成行動を記述していれば、たとえ自我周遍的位置にあるといっても、学業達成は彼等の規範として機能していると言えるであろう。『ひとつ以上の項目への「学業」記述者』という規準で再集計すると、結果は図1の如くなる。殆んどの学生にとって学業達成は彼等の規範として機能していると言えよう。実は表2「5)力をいれたかったができなかった活動」に学業を記述する者が「4)最も力をいれた活動」で学業をあげる者よりも多くなっているが、それは、学業に不全感を抱くほどの規範意識をもつ者の数値と見るべきである。

かくてレジャーセンターにおいても学業達成は公的規範であるにとどまらず、学生文化の規範のひとつであることが検証された。Clark, B.ら(1966)の提出した学生文化の類型にならえば、“collegiate culture”が支配的であるかに見えても“academic culture”もまた学生文化として

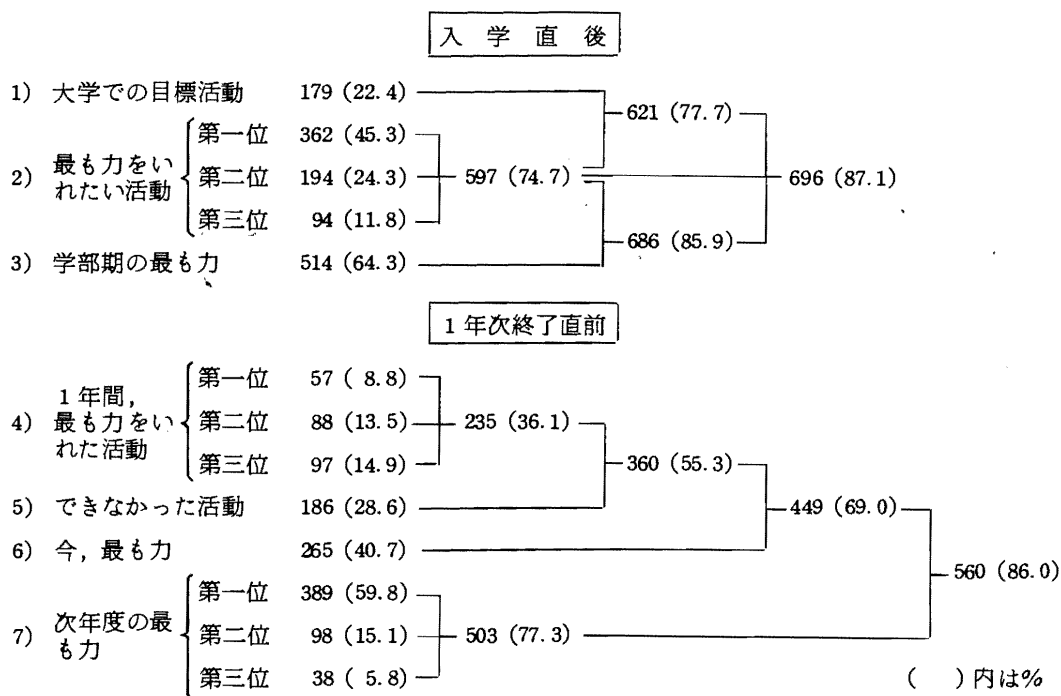


図1 学業達成行動(「出席・試験勉強」+「学業自体」)記述者の再集計

機能しているのである。ゆえに学業達成が大学社会における公的 formal な社会 - 文化適応の基準であり、同時に、informal な社会 - 文化適応の1基準であると見做しうる。

それでは学業達成を基準に大学適応を把えるさいに何が妥当な指標になるのだろうか。一般に考えられやすいのは成績であろう。もちろんここで論議しているのは個別講義への適応ではなく大学社会総体への適応なのだから、何らかの方法で総合成績の合成指標を求めればよさそうである。しかし、それが妥当かという二重の意味で誤まりになる。

第一の誤まりは、合成という、大学 - 学生の機能関連の場を裁定・評価する価値規準そのものから離れた、人工的な操作を行なうことの誤謬であり、第二の誤まりは成績を指標にできると考える、あえていえば「錯視」である。

合成という技法が誤謬でしかないのは次の二つの理由に基く。まず、佐藤(1987)の指摘するように“教官によって成績評価の仕方や基準が異なって多岐にわたる”ために機械的な合成は意味をなさない。更に、そもそも合成なる技法は方法論からみて意味をなさない。というのは、合成とは大学組織と学生間の適応 - 非適応の当事者による判断ではなく第三者の判断技法だからである。一定の場における当事者どうしの機能関連の質・意味はまず当事者が判断することが求められる。当事者が適応 - 非適応、順機能 - 逆機能を判断できないなら、それは当事者が判断できぬ状態として事実認識することが第三者に要請される。例えば、「職場不適応」に関して人事院職員局安全法令研究会(1986)はその判定は職場の管理監督者が行なうのではなく精神科医にゆだねるべきことを主張しているように、この点はしばしば誤解される点である。職場という制度的環境に対する非適応の裁定はその場での制度的規範に基く裁定エージェントの裁定により、逆に、制度的環境の個人に対する非適応の評価者たりうるのは当該の個人である。精神科医やカウンセラーは、第三者として、判断不能に陥った場合の裁定エージェントや個人の価値規準を明確化させる事を援助すること、それと平行して、自らの依拠する精神医学や心理学乃至は社会学・文化学という「思考の文化」(安倍 1969)に基いて、思考の文化に対する適応 - 非適応を判断すること、その二つが許されるにすぎない。⁴⁾ もちろん、第三者としての事実認識学者のみが、Marton, R. K. (1957) のいう latent function, 即ち潜在的レベルでの逆機能 - 順機能を検知できるのであろうが、それは思考の文化からみた適応 - 非適応なのである。我々は先行プロジェクト以来一貫してまず事実認識を行うことに禁欲しており、学生の人格適応を把えるに際して心理検査による適応度や合成得点を採らず「総合的適応感」と名付けた学生自身による総合評価を採っていることとパラレルに、ここでも、まず、我々という第三者による判定ではなく大学組織による判定を公的 formal な大学適応の指標と考える。

第一の問題と密接に関連するのであるが、「成績」を指標にする事が「錯視」なのは、大学組織は学生に対して高成績を決して要求していないことから明らかである。成績不良が大学組織への総合的なマイナス裁定を生みはしない。要求しているのは、卒業必要単位、進級必要単位の数と領域をみだし、更に、「望ましい単位取得の仕方」をしていく事である。高成績を要求するのは教官文化であり、優の数を問題にした掌ての企業人事部文化であり、それらを内化している学生文化に過ぎない。従って、大学社会における公的 formal な社会 - 文化適応の指標は取得単位数に求められる。そして実は、大学厚生補導や大学精神衛生活動が焦点のひとつにしている「留年問題」も、取

得単位数のみで決定されるのである。

他方、留年を回避すべく、卒業所定単位に達すべく、そして次年度以降の負担を軽減すべく、学生もまた単位取得行動を展開していく。表1・2の「出席・試験準備」とは、1年次後期試験直前の傾注対象を問うた表2「6)今最も力をいれていること」への回答がこのカテゴリーで最頻になることから見ても単位取得に指向した活動である。さらにそこで最頻になった事実は、学生文化からみても単位取得が規範であり、学生文化からみた informal な大学適応の1指標として取得単位数を位置づけることを示す。従って、取得単位数は大学社会における formal・informal な社会-文化適応の妥当な指標といえよう。

次に検討すべきなのは我々のフィールドである弘前大学の、今回の分析対象者である教養部学生にとって、どんな領域の単位数が指標として最適か、という問題である。1年間の総取得単位数、一般教育科目単位数、外国語単位数の三つがさしあたって考えられる。

1年次総取得単位数には規則⁵⁾に明確な規定が存在する。2年制の医学部進学課程以外では1年次に文系学部20単位・理系学部24単位を取得することが2年次、即ち学部に進級する要件であり、それ未満が教養留年となる。しかし、医進課程に関しては1年次の要件は存在しない。では教養留年者はどの程度出現するのであろうか。今回の分析対象コホートである昭和59年度入学生では14名に過ぎず、しかもこのうち我々の質問紙調査のパネルになった者は5名であって、大数的分析にはとうていなじまない。また、医進学生に対する規定が存在しないという学部差の問題も考慮すると、1年次総取得単位数は formal な適応の指標としては採用しがたいことになる。

外国語単位数については、医以外は第1外国語の4単位、医では第1・第2外国語計で年8単位が必修になるから、必修数に達したか否かを formal な適応の規準にできそうではある。しかし実は、医以外でも第2外国語を準必修と位置づけるオリエンテーションが与えられる学部も存在するために、外国語単位数を適切な指標と見るのは難があろう。

一般教育科目については、全学部を通して「1年次で24単位以上、2年間で36単位」という公的要望⁶⁾が周知されている。

以上から、formal な適応の指標を一般教育科目にとり、24単位未満を formal な非適応、24単位以上を適応、更に、37単位以上を過剰適応と見なすのが妥当といえる。

他方、学生の間には留年の基準たる総取得単位数に注目してそれを多くしていこうとする雰囲気も存在する。それ故、1年間の総取得単位数が informal な適応の1指標として使えそうである。但し、表3のように、総取得単位数は学部・学科間で違いがあるから、全パネルを一括して扱うには、学部・学科ごとに標準得点に変換することが必要になる。勿論この操作は先に我々が排除した、指標の人工的合成ではなく、学部・学科間の差を消す技法に過ぎない。

表3 学部・学科別の総取得単位数

	n ^{*)}	平均 単位数	SD	
人文	人 文	124	42.85	10.36
	経 済	165	38.73	7.80
教育	小・中	254	43.56	6.62
	他	111	47.15	5.42
理		158	44.08	9.31
医		115	49.37	8.26
農		132	41.33	8.05

*) 休・退学者、他大学での取得単位数がある者はnから除外。

しかし変換にあたって表3に示した数値を使用するのは矛盾がある。我々のパネルは講義出席者であり、講義への出席という formal・informal な規範に適應している層である(豊嶋ほか 1980)。この層の適應の測度として非出席者をコミにした数値から標準得点を採用するのが矛盾なのである。というのは、今問題にしている総取得単位数の標準得点は、学業達成を指向する学生文化への適應の測度なのであり、出席しない文化(例えば、「仮面浪人」なる用語が学生の間で一般化している)への適應者や出席できない事情をかかえた者を含めた標準得点を求めても意味がないからである。そこで各調査回ごとにパネルの学部・学科別標準得点を測度として求めなければならない。

以上、本節では従来の大学生研究で軽視されてきた大学適應の指標としての成績や取得単位数について、適應論からみた吟味を試みた。

2. 留年研究との接点

留年研究が本稿の目的ではないが、取得単位数を指標に扱った以上、1965年以降論議されてきた留年問題への心理学的アプローチとの関連を論じておくべきであろう。近年、青年心理学の1トピックとして遇される様相(西平ほか 1988)を呈しているが、留年現象は大学における社会問題 social problem として先ず注目され⁷⁾、直ちに、学生相談活動に携わる研究者⁸⁾の、遅れて、大学精神衛生活動担当者⁹⁾の、ともに実践的な関心に基く研究領域として存在してきたと言えよう。

留年現象の心理的要因への言及としては、倉石(1968)の“大学生活への心構えの不足”、黒田ら(1976)の“大学内における自己位置づけの困難”、梶中ら(1976)による“自己確認の戦いと環境適應能力の欠如”等があり、宮沢(1988)は留年研究をレビューして“要するに自我同一性未確立”と括っている。

しかしそれら要因は実は非留年者にも広く見出される傾向であって、何故留年者が留年するのかの発生論としては弱い。それに対して留年防止の方法を探るというすぐれて実践的な関心から二つの注目すべき研究がなされている。それは九州大学教養部の留年問題の研究・指導実践(安藤 1981、安藤ほか 1982)と、都立大学学生を対象にした鳴沢(1978)の研究であり、いずれも、留年が決定する時期以前のゼメスターまでの単位数を独立変数として、留年を目的変数とする予測式を提出している。この方略が留年予備軍の援助にとって極めて有効な手掛りを提供することは疑いを容れない。しかしそもそも留年とは単位によって決定することを考えると、実践的な意味の豊かさに比して、学生理解乃至は「学生心理学」への貢献は大きくないと評せざるをえない。「学生心理学」としては、単位や留年が、単位及び成績以外の心理的行動的な変数によってどう予測されるのかというアプローチに関心がひかれる。

このアプローチとしては、京都大学学生を対象とし、入学時の自己観との関連を見出した梶中(1971)、自己観のちがいに加えて入学時における精神健康度・関心領域・卒後展望に差を見出した藤井ら(1975、1977)があり、先述した安藤(1981)も、経済性や実践の意味で問題があると留保条件をつけてはいるが、生活体制・過去未来へのイメージ・価値観・性格により類型化した上での予測を試みているし、また鳴沢(1978)も有意な結果はえられなかったもののCMI・CASによる予測を行なっている。今回の我々の分析もこれら先行研究と同様のアプローチに拠る。

しかし我々が留年をではなく取得単位数を予測しようとすることには、前節でのべた意味に加え、

2つの利点がある事を確認しておきたい。第1は、留年を規準とすることによっては見落とされる大学への過剰適応層の予測が可能になること、第2は、留年の決定因たる取得単位数は連続的事象であるから連続変数として取扱うのが適当であること、である。

以上この節では、本研究が学生理解という事実学的関心に基くこと、留年の決定因たる単位数を心理的行動的変数によって予測するアプローチに立つことを述べた。なお、本研究の対象者の卒業留年を1年次の生活体制から予測する試みは既に展開している（豊嶋 1988）ことを断っておきたい。

II 方 法

既述のごとく、昭和59年度入学生を対象に、説明変数としての生活体制が1年次に3回（第1回：入学直後一開講第1週、第2回：7月－夏休み直前の週、第3回：1年次終了時点－後期末試験直前の週）実施した質問紙調査によって把握され、目的変数としての1年次取得単位数が教養部の公的データによって把握された。

質問紙調査は、週5回開講された心理学講義の出席者（登録者は799名、全入学生の74.0%）に対して講義時間中に実施・回収された。心理学講義が選ばれたのは、昭和52年度以来の我々の追跡研究対象者と同一の条件にするためである。質問紙の内容は中層接近的社会心理学（安倍 1969）の接近法に則り、学生が学生生活において出会う主要な行動空間とのかかわり方や関与度、学生の傾注対象や生活空間構造、生き方・人生指針・進路展望のあり方、大学・学部・学科への満足（本意）感、それらを問うたのちに設問される「要するに、入学決定以来のあなたの学生生活は全体としてうまくいっていますか?」との問いに対する反応（これを我々は大学の人格適応のトータルな指標と見なし、総括的適応感と呼んでいる。これは以下、total feeling of summarized adjustmentの頭文字をとって、SAと略記される。）、今後の学生生活に対する予期的評価・予想などが問われている。これらを一括して、生活体制と呼んでおく。今回の分析では、それらのうち五段階評定項目への反応が説明変数として使用される。五段階評定項目への反応は、最も積極的・人格適応的の反応に1点、最も消極的・人格非適応的の反応に5点、中間（「どちらともいえない」）に3点が割当てられた。

なお、質問紙の設問構成は調査時点の時期的特質に応じて異なっている。例えば、入学直後では、主に、受験期の生活体制への回顧と1年次への予期的評価が問われるのに対して、1年次終了時調査では、1年間の生活体制への回顧と次年度への期待・展望が問われる、というようにである。

公的な大学適応の指標には一般教養科目の一年間の取得単位数が選ばれ、informalな指標としてはT得点化した総取得単位数が選ばれた。前者では37単位以上が過剰適応、24単位未満が非適応とグルーピングされること、及び、後者では、各回の有効パネルごとに、表4の数値をもとに学部・学科別に標準化されることも既述した通りである。

公的な適応の三群、即ち公的な過剰適応群（以下、A群）・公的な適応群（B群）・公的な非適応群（C群）を分化・特徴づける予測要因の検討は、生活体制に関する反応の平均値比較（t検定）をもとになされる。その際、三群間すべてで同方向の差が検出された変数が三群をよく分化する変

数とみなされ、これに、AからCにかけて観測値の漸増または漸減があるものA：Cのみで差が認められた変数も加えて、A～Cの公的な大学適応連続体の両端（即ちA及びC）を特徴づける変数として位置づける。A：CとB：Cのみで同方向の差が認められた変数がCを特徴づけ、A：BとA：Cのみで同方向の差が認められた変数がAを特徴づける、と扱えられる。

informalな適応の予測要因は、T得点に換算した総取得単位数を目的変数、生活体制に関する変数を説明変数として、導入・除去の基準を10%にした逐次重回帰分析によって扱える。10%を採ったのは我々の関心が有意な変数の確定それ自体や重回帰式それ自体ではなく、目的変数に予測的関連をもつ領域や生活体制をわり出すことにあるからである。

各時点の有効資料数は、入学直後で789、入学3ヶ月後で550、1年次終了時で647。それぞれ全入学生の73.1%、50.9%、59.9%にあたる。質問紙調査の有効パネルでも、他大学での取得単位が認められた者や休学者、及び実質的な休学者と見なしうる取得単位ゼロの者は、有効資料から除かれた(表4)。

なお、分析に使用した変数の項目内容は文末・付に示したが、紙幅の都合上、入学直後と1年次終了時点の2調査については豊嶋(1987)の文末資料にゆずり、入学3ヶ月後(夏休み直前)調査の項目内容に限定した。

表4 入学者数、有効資料数、平均総取得単位数

学部・学科	入学者数 計 1080	第1回(入学直後)調査			第2回(7月時)調査			第3回(1年次終了時)調査		
		n	平均単位数	SD	n	平均単位数	SD	n	平均単位数	SD
人 文	130 [12.0]	80 (10.1)	44.16	7.77	52 (9.5)	46.52	5.83	70 (10.8)	46.44	6.33
	165 [15.3]	120 (13.2)	39.51	7.35	97 (17.6)	39.87	7.38	118 (18.2)	39.50	7.54
教 育	259 [24.0]	201 (25.5)	43.88	6.17	126 (22.9)	45.76	5.32	159 (24.6)	44.79	5.82
	111 [10.3]	104 (13.2)	47.40	5.19	73 (13.3)	48.49	4.50	88 (13.6)	47.96	4.94
理	160 [14.8]	121 (15.3)	45.08	8.53	84 (15.3)	45.93	7.71	85 (13.1)	46.32	7.79
医	120 [11.1]	72 (9.1)	50.78	8.20	50 (9.1)	51.74	8.46	57 (8.8)	51.49	8.16
農	135 [12.5]	91 (11.5)	43.11	7.65	68 (12.4)	43.53	7.74	70 (10.8)	44.76	7.34
過剰適応(A)群		334名(42.3%)			256名(46.5%)			301名(46.5%)		
適応(B)群		422(53.5)			276(50.2)			323(49.9)		
非適応(C)群		33(4.2)			18(3.3)			23(3.6)		
有効資料計		789名			550名			647名		

[]内は入学者数への%、()内は各回の有効資料計への%。

Ⅲ 入学直後の生活体制による予測

(1) 公的な大学適応の予測因

表 5 に A (過剰適応)・B (適応)・C (非適応) 各群の入学直後調査36項目に対する反応を示した。三群間すべて同方向の差が検出されたのは、「高・受験期の関与度-学業自体」(変数番号 3。以下、変数名に続く括弧内の数字は変数番号を示す。), 「対家族の展望」2 変数 (33, 34) であり、これらが三群をよく分化する。これに、「高・受験期関与度-交友」(5), 「卒後進路明確度」(36) を加え計 5 変数が両端の群 A と C を特徴づける変数とみなしうる。

A 群を特徴づける変数としては「高・受験期の関与度-クラブ活動」(4), 「同-遊び・趣味」(7) があり, C 群を特徴づける変数としては「進学目的の明確度」(1), 「適性 vs 偏差値」(14), 「所属満足感-大学」(15), 「学業への意欲」(22), 「対講義-魅力度」及び「出席意欲」(23・25), 「専門準備意欲」(26), 「対教官交流意欲」(27) の計 8 変数があげられる。

他のパターンの差が見出された 4 変数, 「自己肯定」(13), 「SA ; 総括的適応感」(21), 「友人獲得意欲-巾」(29), 「対先輩交流意欲」(31) は, A から C にかけて平均値が U 字又は \cap 字型に推移する特異な予測因といえよう。

以上から, A (過剰適応) 群の他群と比較した特質は次のように括ることができよう。

- ① 変数番号 3・4・7 より, 大学入学以前には高校の制度的な活動, 即ち学業自体やクラブ活動 (このカテゴリーにはクラス活動や生徒会活動も含まれる) への関与度が強く, 逆に趣味・遊びへの関与度が弱い。
- ② 変数番号 33・34 より, 対家族の準拠と良好な関係。
- ③ 変数番号 36 より, 卒後進路にやや明確なイメージをもつ。
- ④ B 群に比べ, 自己肯定 (変数番号 13。これは『自己をかえりみた結果, 自分が好きか嫌いか』を問う) が不良である。しかも平均値が 3.30 と明確に“嫌い”に傾く。また SA (変数番号 21) も B 群に比べ不良であり, 学生生活の順調感が弱いことを示す。
- ⑤ 変数番号 5・29・31 より, B 又は C 群に比べ, 交友や先輩との交流といった対人ネットワーク形成の意欲が強いといえよう。

要するに, 高校期から公的要請への適応の構えが強く家族にも適応的な関係を保ち, 進路イメージもやや確かな, 過適応・早期完了的な特徴と交友への志向を強く示すことが, 1 年後の過剰な取得単位数をもたらす, また, 不良な自己肯定が, 補償の機制を媒介に公的期待への過剰適応をもたらす, と解される。

C (非適応) 群の特質は次の通りである。

- ① 変数番号 1・36 より, 将来展望の不明確さ。
- ② 変数番号 14 (これは, 『進学進路選択に当って適性と偏差値のどちらを重視したか』という設問で扱われた)・15 より, 偏差値偏重の進路選択と弘前大学への不本意感。
- ③ 変数番号 21 より, B 群に比べ不良な SA。
- ④ 変数番号 3・22・23・25・26・27 より, 高校期以来一貫した学業への消極的構え。

表5 入学直後時点における三群の反応

変数番号	変数名		A(過剰適応)群			B(適応)群			C(非適応)群			比較(t値)				
			n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	A vs B	A vs C	B vs C		
1	回	進学目的の明確度	333	1.98	.96	419	2.02	1.09	32	2.47	1.46	—	2.60**	2.20*		
2		高校～ 受験期の 関与度	受験準備	334	2.53	1.01	422	2.63	1.12	33	2.73	1.26	—	—	—	
3			学業自体	333	2.54	.97	422	2.77	1.05	33	3.21	1.27	3.06**	3.69***	2.32*	
4			クラブ活動	333	2.52	1.29	420	2.82	1.37	33	3.09	1.45	3.03**	2.39*	—	
5			交友	332	2.06	.85	419	2.08	.94	31	2.35	1.20	—	1.78°	—	
6			生き方確立	330	2.63	.96	416	2.52	1.08	33	2.67	1.24	—	—	—	
7			遊び・趣味	334	2.61	.99	421	2.39	1.06	32	2.28	1.14	-2.96**	-1.78°	—	
8			高校期総括	余裕感	333	2.68	.96	420	2.69	1.06	33	2.60	1.22	—	—	—
9		満足感		333	2.40	1.08	422	2.50	1.16	33	2.48	1.00	—	—	—	
10	現在への 評価	生き方 人生指針	考える時間	334	2.49	.97	422	2.42	1.01	33	2.36	.96	—	—	—	
11			明確度	334	3.13	1.13	422	3.11	1.18	33	3.12	1.29	—	—	—	
12		自己省察	333	2.34	.97	422	2.35	1.08	33	2.39	1.03	—	—	—		
13		自己肯定	331	3.30	1.08	413	3.11	1.10	32	3.06	1.27	-2.36*	—	—		
14		適性 vs 偏差値	333	2.99	1.18	420	3.10	1.31	33	3.60	1.22	—	2.88**	2.29*		
15		所属への 満足感	大学	334	2.47	.97	422	2.42	1.11	33	2.82	1.04	—	1.95°	2.09*	
16			学部	334	2.00	.97	422	1.97	1.06	33	2.06	1.03	—	—	—	
17			学科	330	2.10	1.03	414	2.20	1.17	32	2.19	1.09	—	—	—	
18			再受験志向	334	2.14	1.21	421	2.15	1.30	33	2.36	1.37	—	—	—	
19	地域への満足感	331	2.79	1.03	419	2.71	1.05	32	2.94	1.19	—	—	—			
20	充実感	333	2.89	1.02	421	2.77	1.07	33	2.97	.98	—	—	—			
21	SA(総括的適応感)	333	2.63	.89	416	2.55	.91	33	2.82	.92	—	—	1.66°			
22	今後の学生 生活への 予想・展望	フォーマル局面	学業への意欲	333	1.71	.78	422	1.77	.79	33	2.09	1.07	—	2.55*	2.16*	
23			対講義	魅力度	334	2.67	.81	421	2.72	.88	33	3.33	1.14	—	4.29***	3.77***
24				適応予想	329	2.58	.73	414	2.61	.81	32	2.66	1.07	—	—	—
25		出席意欲		334	1.51	.71	420	1.57	.73	33	1.91	1.10	—	2.92**	2.44*	
26		専門の準備意欲	334	2.25	1.02	421	2.16	1.04	33	2.64	1.17	—	2.05*	2.48*		
27		対教官交流意欲	334	2.14	.92	422	2.18	.94	33	2.61	1.06	—	2.76**	2.46*		
28		インフォーマル局面	サークル関与意欲	333	1.95	1.05	422	1.93	1.10	33	2.00	1.23	—	—	—	
29			友人獲得 意欲	巾	334	1.31	.62	421	1.47	.89	32	1.41	.87	2.64**	—	—
30				積極度	334	1.64	.82	421	1.74	.96	32	1.88	1.21	—	—	—
31	対先輩交流意欲		334	1.71	.86	422	1.87	.97	33	1.76	1.09	2.36*	—	—		
32	対友人適応予想		334	2.37	.77	422	2.30	.86	33	2.30	.89	—	—	—		
33	対家族		交流意欲	333	1.93	.84	421	2.14	.92	33	2.82	.92	3.34**	5.76***	4.06***	
34		適応予想	333	1.92	.85	421	2.03	.84	33	2.58	1.00	1.86°	4.20***	3.54***		
35	全体的適応予想	334	2.33	.59	421	2.30	.65	33	2.39	.56	—	—	—			
36	卒後進路明確度	334	2.28	1.24	420	2.42	1.33	33	2.67	1.51	—	1.66°	—			

注 \bar{x} (平均値)は高得点ほど消極的・人格非適応的の反応であることを示す。
° $P < .01$, * $< .05$, ** $< .01$, *** $< .001$ 。—はn.s.。

⑤ 変数番号5より、交友への関与がやや弱かった高校期。

⑥ 変数番号33・34より、対家族の弱い準拠と良好でない関係。

要するに、長期展望を欠き無目的で偏差値偏重の進路選択と不本意入学感。不良なSA、学業への弱い関心と不良な家族関係を示すほど1年後の学業非適応が生じやすいと言えよう。更に、高校期の交友に関して詳細にみると、変数2～9の関与度において、他の二群は交友が最も低得点、即ち関与度が最大になっているのに対して、C群では「遊び・趣味」で最大の関与度がえられている。これは、高校期の生活空間構造の中核がA・B両群にあっては交友におかれているのに対して、C群にあっては個人的活動に中核があり交友はやや周辺部におかれていた事を示唆するものであろう。

(2) informalな大学適応の予測因

T得点化した総取得単位数を目的変数にした逐次重回帰分析の結果を表6に示した。説明変数は消極的・人格非適応的の反応ほど高得点になるのに対して目的変数は社会適応的なほど高得点になるという方向性のねじれがあるが、表6では、標準偏回帰係数(Std B)の正負を逆にしてある。この点は、IV・V章の表8・表10でも同じである。

36変数中の12変数によって.342の重回帰相関係数をもつ回帰式をえた。相関の値は小さいが、試験直前の学業行動(例えば「一夜漬け」)によっても強く規定されるであろう単位数がほぼ1年前の生活体制によっても規定される点が重要であろう。12変数のうち、変数番号2・3・5・7・13・14・15・25・33は前節でも予測因として抽出されたものであるが、「大学満足感」(15)がここでは抑制変数であることは興味深い。これらに加えて、「高校期の関与度-生き方確立」(6)、「所属満足感-学部」(16)、「大学でのサークル関与意欲」(28)の3変数でいずれも抑制的な予測性が見出された。

要するに、前節で予測因として指摘された諸項、即ち、総単位数をおしあげる要因としての高校期における公的・制度的活動及び交友への強い関与、家族との良好な関係、偏差値よりも適性を重視して進学進路選択、大学講義への積極的構え、総単位数を抑制する要因としての自己受容の良さ、等がそのままここでも予測因として機能しているが、更に、大学への満足感と学部

表6 入学直後反応による逐次重回帰分析

No.	変数名	標準偏回帰係数(Std B)	t値
3.	高校(受験)期の関与度;学業自体	+ .109	2.87**
4.	同上;クラブ活動	+ .135	3.51***
5.	同上;交友	+ .089	2.17*
6.	同上;生き方確立	- .128	3.36**
7.	同上;遊び・趣味	- .135	3.43**
13.	自己肯定	- .068	1.81°
14.	適性 vs 偏差値	+ .111	2.88**
15.	所属満足感;大学	- .082	1.93°
16.	同上;学部	- .088	2.05*
25.	対講義;出席意欲	+ .064	1.71°
28.	サークル関与意欲	- .118	3.16**
33.	対家族交流意欲	+ .167	4.43***

df = (12, 696) F = 7.55**
multiple R = .349 R² = .117

°P < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

への満足が総単位数を抑制している事から、本意入学感によって学業達成が阻害される傾向が一層明確になったと言えよう。また、生き方確立への志向やサークル関与意欲によっても学業達成が阻害されやすい事が見出された。

IV 入学3ヶ月後(夏休み直前)の生活体制による予測

(1) 公的な大学適応の予測因

表7にA・B・C各群の反応と比較結果を示す。三群をよく分化する変数としては「対講義-出席度」(3),「語学予復習」(5),「7月までの関与度-出席行動及び学業自体」(14・15),「今後の交友意欲」(38)の計5変数があり、これに「7月までの関与度-サークル活動及び交友」(16・17),「生き方-考える時間」(21),「所属満足感-大学・学部」(25・26),「今後のサークル活動意欲」(37)もA・Cという両端の群を特徴づける。

A群を特徴づける変数としては「支えの発見」(30,『学生生活を送る上での支えを感じる他者・集団を見出したかどうか』を問う),「学業一般,及び,講義への意欲」(33・34),「深い友人の獲得意欲」(39)がえられ、C群を特徴づけるものとしては「対講義適応感」(2,『ついていけたか』を問う),対家族の2変数(11・12),「生き方-明確度」(22),「所属満足感-学科」(27),「地域満足感」(29),「全体的適応予想」(41),「卒後進路明確度」(42)がある。他,「先輩との交流度」(9)がA・B両群を分化している。

以上から、A(過剰適応)群の他群と比べた特質を次のようにまとめることができる。

- ① 変数番号3・4・14・15・33・34より、入学後3ヶ月間の、出席行動を中心とした学業への関与と、今後の学業への関与意欲。但し、かかる積極的構えは、教養部講義に魅力を感じて生じたものではなく、“出席すべきだから、関与すべきだから”という義務感に基くものであるらしい。というのは項目番号1「対講義-魅力度」のA群の得点が他二群と差をもたずしかも3.29と明確に“魅力なし(つまらない)”に傾くからである。
- ② 変数番号16・37のサークル関与に関する変数、及び、9・17・38・39の交友に関する変数より、入学後3ヶ月間のサークル活動・交友への強い関与と、両者に対する今後の強い関与意欲。
- ③ 変数番号30より、大学生生活を支える他者・集団の発見感。
- ④ 変数番号21より、生き方確立への弱い関心。
- ⑤ 変数番号25・26より、大学・学部への満足感。

要するに、出席行動や予復習行動を中心とした学業領域、サークル・交友というinformal領域の双方に対するこれまでの強い関与と今後への強い意欲、サークル・交友を通してえられた明確な自我支持機能をもつ準拠集団の発見、所属性への満足感が、A群の特徴であるが、しかしかかるpositiveな特徴にもかかわらず、あるいは、かかる特徴ゆえに、生き方確立という基本的な発達課題への関心がやや弱いこともA群の特質になる。

表7 入学3ヶ月後（夏休み直前）における三群の反応

変数番号	変数名			A(過剰適応)群			B(適応)群			C(非適応)群			比較(t値)			
				n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	A vs B	A vs C	B vs C	
1	回	フォー マル 局 面	魅 力 度	256	3.29	.92	276	3.36	.88	18	3.50	.86	—	—	—	
2			対 講 義	適 応 感	252	2.61	.85	272	2.63	.80	18	3.11	.83	—	2.48*	2.45**
3				出 席 度	253	2.27	.85	275	2.62	.93	18	3.11	1.08	4.50***	3.99***	2.14*
4				語 学 予 復 習	255	3.25	1.25	274	3.43	1.21	18	4.12	.92	1.69°	3.98**	3.22**
5			専 門 準 備 度	254	4.23	1.04	276	4.28	1.04	17	4.47	.87	—	—	—	
6			対 教 官 交 流 度	255	4.55	.74	273	4.53	.87	18	4.50	.62	—	—	—	
7	願	イン フ ォ ー マ ル 局 面	対 友 人	積 極 性	256	2.43	1.02	274	2.55	1.05	18	2.78	1.06	—	—	—
8				友 人 数	253	2.42	.84	274	2.47	.87	18	2.39	.70	—	—	—
9			先 輩 と の 交 流 度	先 輩 と の 交 流 度	253	2.31	1.09	272	2.56	1.20	18	2.72	1.02	2.42*	—	—
10				適 応 感	254	2.02	.75	274	2.01	.72	18	2.22	.65	—	—	—
11		対 家 族	適 応 感	256	2.17	.92	275	2.27	1.01	18	3.06	.80	—	4.47***	3.98**	
12			交 流 度	256	1.78	.79	276	1.89	.86	18	2.56	.62	—	5.05***	4.31***	
13		目 標 活 動 実 現 度	256	3.21	1.08	276	3.33	1.08	17	3.35	.99	—	—	—		
14	7月 ま で の 関 与 度 の 総 括		出 席 行 動	256	2.52	.93	276	2.75	.96	18	3.17	.79	2.86**	3.35**	2.14*	
15			学 業 自 体	256	3.28	1.02	276	3.43	1.03	18	3.89	1.02	1.73°	2.45*	1.84°	
16			サ ー ク ル 活 動	256	2.55	1.35	276	2.67	1.41	18	3.22	1.56	—	2.02*	—	
17			交 友	256	2.05	.80	276	2.16	.89	18	2.39	1.15	—	1.67°	—	
18			生 き 方 確 立	256	2.99	.98	276	2.99	1.03	18	2.78	.81	—	—	—	
19			遊 び	256	2.53	1.02	276	2.41	1.05	18	2.44	.86	—	—	—	
20			ア ル バ イ ト	256	4.18	1.18	276	4.19	1.26	18	4.00	1.46	—	—	—	
21	現 在 へ の 評 価	生 き 方 人 生 指 針	考 える 時 間	256	2.59	1.01	276	2.50	1.02	18	2.22	.65	—	-2.25*	—	
22			明 確 度	256	3.04	1.16	276	3.13	1.13	17	2.59	.87	—	-2.04°	-2.45*	
23		自 己 省 察	自 己 省 察	255	2.42	.97	276	2.46	1.05	18	2.22	.88	—	—	—	
24			自 己 肯 定	250	3.21	1.09	272	3.17	1.01	18	3.22	.94	—	—	—	
25		所 属 へ の 満 足 感	大 学	256	2.26	.95	276	2.37	.98	18	2.67	1.09	—	1.75°	—	
26			学 部	256	1.98	.96	276	2.03	.98	18	2.39	1.15	—	1.74°	—	
27			学 科	248	2.10	1.00	269	2.13	1.04	18	2.56	1.20	—	1.82°	1.68°	
28			再 受 験 志 向	256	1.85	1.07	276	1.84	1.14	18	2.28	1.18	—	—	—	
29		地 域 へ の 満 足 感	256	2.68	1.07	276	2.66	1.10	18	3.17	1.30	—	1.82°	1.88°		
30	支 え の 発 見	支 え の 発 見	253	2.55	1.01	273	2.72	1.10	17	3.06	1.20	1.91°	2.06*	—		
31		充 実 感	255	2.73	1.04	275	2.81	1.06	18	2.94	1.16	—	—	—		
32		S A (総 括 的 適 応 感)	254	2.44	.78	272	2.46	.78	18	2.72	.75	—	—	—		
33	今 後 へ の 期 待 展 望	フ ォ ー マ ル	学 業 一 般 へ の 意 欲	256	1.94	.83	276	2.14	.92	18	2.50	.86	2.68**	2.78**	—	
34			講 義 へ の 意 欲	256	1.84	.83	276	2.09	.91	18	2.33	.91	3.36**	2.43*	—	
35			前 期 試 験 へ の 自 信	256	3.22	1.08	276	3.16	1.14	18	3.28	1.07	—	—	—	
36			専 門 へ の 意 欲	256	2.43	1.11	274	2.59	1.16	18	2.67	.97	—	—	—	
37	イン フ ォ ー マ ル	サ ー ク ル 活 動 意 欲	サ ー ク ル 活 動 意 欲	254	2.11	1.21	276	2.28	1.28	18	2.78	1.35	—	2.25*	—	
38			交 友 "	256	1.63	.74	276	1.76	.87	18	2.28	1.13	1.82°	3.44**	2.39*	
39			深 い 友 人 の 獲 得 "	256	1.43	.69	276	1.56	.83	18	1.83	.99	2.05*	2.34*	—	
40			生 き 方 確 立 "	256	1.81	.87	276	1.83	.79	18	1.89	.90	—	—	—	
41		全 体 的 適 応 予 想	249	2.46	.72	263	2.45	.69	17	2.88	.86	—	2.33*	2.49*		
42		卒 後 進 路 明 確 度	254	2.52	1.35	271	2.63	1.34	17	3.41	1.28	—	2.78*	2.45*		

注 \bar{x} (平均値)は高得点ほど消極的・人格非適応の反応であることを示す。
°P<.01, *<.05, **<.01, ***<.001。—はn.s.。

これに対してC群は、以下によって特徴づけられる。

- ① 変数番号 2～4・14・15より、入学後3ヶ月間における学業への弱い関与。「対講義 適応感」からは教養部講義が理解できにくい状態にあること、「語学予復習」の得点(4.11)からは、殆ど予復習をしていないことが知られる。理解困難と予復習しないことは相互規定的なものであろう。
- ② 対家族の2変数(11・12)より、家族との間の不良な関係、弱い準拠。
- ③ 変数番号 16・17, 37・38より、これまでの交友・サークルへの弱い関与と今後への弱い意欲。
- ④ 生き方の2変数(21・22)より、生き方確立への強い関心と生き方の明確化。
- ⑤ 変数番号 42より不明確な卒業進路展望。
- ⑥ 変数番号 25～27・29より、所属性(大学・学部・学科)及び地域性への弱い満足感。
- ⑦ 変数番号 41より、今後の人格適応(学生生活の順調感)がえにくいとの予想。

要するに、C(非適応)群の入学後3ヶ月間の生活体制としては、理解できず予復習もしない、学業への弱い関与に加え、大学生生活のinformal領域への関与及び関与展望も弱く、家族との関係も非適応的であって、そのために今後の人格適応に自信がもてず卒業展望も不確か、といった像がえられる。しかし、あるいは、そのゆえに、生き方や人生観を明確化する「苦闘」を試みてきて、その結果、卒業後の進路といった遠い具体的な展望こそ不確かながらも、生き方はやや見えてきた状態にあるといえよう。この生き方の内容が、学業との関連に乏しいために、1年後の公的な非適応がもたらされるのであろう。

(2) informalな大学適応の予測因

分析結果を表8に示す。5変数で有意なStd B値をえた。重相関係数は.367。前章でみた入学直後での12変数によるものと差のない重相関係数に達している。

ここでは、informal諸領域との関わりや所属満足感、今後の学生生活への期待・展望などは予測性が弱いことが示唆された。予測性をもつのは、まず、入学後3ヶ月間の講義への出席度(変数番号3)と『ついていけた』との感覚(2)であり、それらが1年終了時の総取得単位数をおしあげる。逆に、生き方確立への関心(21)

や自己肯定(24)、専門研究の準備度(5)は総単位数をおし下げる。前節で指摘したように生き方確立のための「苦闘」が社会適応を低下させ、自己肯定の良さから推測される現状肯定・現状満足の構えが社会適応を低下させ、専門研究への尚早なとりくみから示唆される「教養」軽視の構えが社会適応を低下させるものと解しうる。

表8 入学3ヶ月後反応による逐次重回帰分析

No	変数名	Std B	t値
2.	対講義; 適応感	+ .102	2.23*
3.	同上; 出席度	+ .302	6.75***
5.	専門準備度	-.086	1.92°
21.	生き方・人生指針; 考える時間	-.148	3.32**
24.	自己肯定	-.112	2.54*
df = (5, 458) F = 14.12***			
multiple R = .367 R ² = .135			

°P < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

V 1年次終了時点（期末試験直前）の生活体制による予測

(1) 公的な社会適応の予測因

比較結果は表9の通りである。三群をよく分化するのは、「出席度」（項目番号8）、「前期試験成功感」（11）、「対家族交流度」（20）、「関与度総括－学業自体」（22）、次年度の「研究室内交流への意欲」及び「専門研究意欲」「対先輩交流意欲」（40, 41, 45）、「卒後進路明確度」（52）の計7変数であり、これにA対Cという両端の群間のみでやや差のみられた、次年度の「講義魅力度予想」及び「新友人獲得意欲」（36, 44）を加えた計9変数が、A及びC群を特徴づけるものである。

A群を特徴づける変数としては、「語学予復習」（9）、「友人数」（16）、「関与度総括－出席行動」（21）、次年度への「出席意欲」「対教官交流意欲」「深い友人獲得意欲」（38, 39, 43）があり、C群をよく分化する変数としては、所属及び地域への満足感の全変数（1～5）、対講義の「魅力度」及び「適応感」（6, 7）、「専門準備度」（10）、「対教官交流度」（13）、「対先輩交流度」（17）、対家族の3変数（19, 49, 50）、SA（34）、次年度への「学業への意欲」（35）、「全体的適応予想」（51）がある。但し、以上のうち「友人数」はA群が最も否定的反応になっている。

他、A・B両群のみを分化する変数として「関与度総括－遊び」（26）、「生き方を考える時間」（28）、「自己肯定」（31）、次年度の「対友人適応予想」（47）があるが、これらはすべて、B群が最も積極的・人格適応的な反応を示すU字型の推移をみせている。

以上からA（過剰適応）群の特質は7項に括れるであろう。

- ① 変数番号8・9・11・21・22・36・38・41の学業に関する変数群の結果から、高い出席度と語学予復習に顕われた1年間の学業に対する相対的に強い関与、及び、前期試験の成功感と、次年度の出席・専門研究への強い意欲。但し、「語学予復習」（9）にしても「前期試験成功感」（11）にしても、前者のA群の平均値が3.42、後者が2.92であって中間的反応に留まっているし、「講義の魅力度」（6）も3.28にすぎないから、1年間の関与は決して十分なものではなく、単に出席度が高い（2.43）ことを中心とした相対的な強さに過ぎない。即ち、学業行動に関して他群からA群を分化する鍵が出席の良さにあると言えよう。
- ② 変数番号39・40より、次年度から所属性がうまれる研究室（ゼミ）という公的制度的枠内でのかかわりへの強い意欲。
- ③ 変数番号16・44・45より、友人の巾の狭さと、おそらくそのために生ずる友人拡大への意欲。「対友人適応予想」（47）がB群よりも不良でC群と差のないレベルにあることに注目すると、拡大への意欲は現在の友人関係への不満のみならず、友人関係への不安の反動形成の可能性も潜む。
- ④ 変数番号20より、家族との密な交流。
- ⑤ 変数番号52より、明確な卒後進路展望。
- ⑥ 変数番号26より、B群に比べて個人的趣味や遊びへの関与度が弱いこと。
- ⑦ 変数番号28・31より、B群に比べ、生き方確立への関心が弱く、自己嫌悪も強いこと。自己肯定ができにくいにもかかわらず生き方を確立しようとしないうと見るか、できにくいから確立への関心も生じにくいと見るかは決め難いが、両者は関連がありそうである。

表9 1年次終了時点(期末試験直前)における三群の反応

変数番号	変数名		A(過剰適応)群			B(適応)群			C(非適応)群			比較(t値)				
			n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	A vs B	A vs C	B vs C		
1	所属への満足感	大学	301	2.34	.93	323	2.41	.99	23	2.87	1.25	—	2.54*	2.10*		
2		学部	301	2.01	.87	323	2.11	.96	23	2.61	1.03	—	3.16**	2.37*		
3		学科	295	2.18	.95	317	2.27	1.00	23	2.70	1.06	—	2.48*	1.99*		
4		再受験志向	300	1.94	1.10	322	1.92	1.15	23	2.43	1.31	—	2.05*	2.07*		
5	地域への満足感		301	2.80	1.05	322	2.70	1.13	23	3.48	1.16	—	2.98**	3.19**		
6	回	フォー	魅力度	301	3.28	.87	323	3.31	.90	23	3.87	.87	—	3.16**	2.89**	
7			対講義	300	2.65	.78	322	2.69	.86	23	3.00	.95	—	2.04*	1.65°	
8			出席度	301	2.43	.92	321	2.96	.97	23	3.57	.84	6.98***	6.20***	3.31**	
9			語学予復習	300	3.42	1.23	323	3.87	1.21	23	4.13	1.01	4.61***	3.20**	—	
10			専門準備度	300	4.07	1.03	322	4.18	1.03	23	4.61	.84	—	2.93**	2.31*	
11		前期試験成功感	301	2.92	1.17	323	3.29	1.16	23	4.30	.70	4.04***	8.64***	6.35***		
12		後期試験の自信	301	3.69	.97	322	3.74	.99	23	3.91	.90	—	—	—		
13		対教官交流度	297	4.34	.90	323	4.42	.87	23	4.74	.54	—	3.21**	2.59*		
14		イン	サークル関与度	297	3.14	1.53	318	2.97	1.59	23	3.17	1.64	—	—	—	
15			フォー	積極性	301	2.50	.87	322	2.49	.97	23	2.57	1.08	—	—	—
16				友人	293	2.49	.83	315	2.31	.90	23	2.17	1.19	-2.52*	-1.68°	—
17				対先輩交流度	301	2.53	1.17	323	2.50	1.20	23	3.04	1.36	—	1.98*	2.79*
18				適応感	301	2.08	.83	323	2.04	.82	23	2.26	.96	—	—	—
19	対	適応感	300	1.85	.81	322	1.92	.86	23	2.74	.54	—	7.31***	6.72***		
20		家族	299	2.22	.92	322	2.35	1.01	23	3.09	.79	1.68°	5.01***	4.23***		
21	願	1年間の関与度総括	出席行動	301	2.36	.95	323	2.59	.97	23	2.83	.78	3.08**	2.75*	—	
22			学業自体	301	3.18	1.00	323	3.44	.97	23	3.91	.90	3.35**	3.75**	2.43*	
23			サークル活動	301	2.68	1.29	323	2.61	1.36	23	2.96	1.64	—	—	—	
24			交友	301	2.13	.85	323	2.15	.89	23	2.26	1.14	—	—	—	
25			生き方確立	301	2.82	.97	323	2.75	1.02	23	2.52	.99	—	—	—	
26			遊び	301	2.33	.95	323	2.09	.91	23	2.26	1.05	-3.13**	—	—	
27			アルバイト	301	3.44	1.28	323	3.34	1.36	23	3.26	1.39	—	—	—	
28	現在の評価	生き方	301	2.67	1.04	323	2.51	.98	23	2.74	.96	-2.02*	—	—		
29		人生指針	301	3.13	1.13	323	2.99	1.04	23	3.18	1.10	—	—	—		
30		自己省察	301	2.34	.86	323	2.32	.98	23	2.26	1.14	—	—	—		
31		自己肯定	298	3.28	1.06	318	3.11	1.05	23	3.26	1.10	-2.06*	—	—		
32	評価	支えの発見	300	2.51	.99	321	2.52	1.03	23	2.74	1.32	—	—	—		
33		充実感	298	2.84	.96	323	2.83	.97	23	3.04	1.15	—	—	—		
34		S A(総括的適応感)	301	2.47	.75	320	2.49	.73	23	2.91	.95	—	2.70**	2.61**		
35		次年度への期待・展望	フォー	学業への意欲	297	1.92	.82	316	1.93	.88	23	2.26	.92	—	1.90°	1.75°
36	対講義			魅力度	297	2.39	.91	315	2.46	.93	23	2.74	1.14	—	1.74°	—
37				適応予想	296	2.70	.78	314	2.71	.93	23	2.91	1.16	—	—	—
38				出席意欲	297	1.58	.65	316	1.84	.81	23	2.04	1.19	4.46***	3.09**	—
39				対教官交流意欲	297	1.81	.83	313	1.94	.92	23	2.26	1.18	1.85°	2.43*	—
40	研究室内交流		297	1.71	.81	316	1.88	.87	23	2.39	1.12	2.53*	3.78***	2.64**		
41	専門研究		297	1.56	.70	316	1.73	.84	23	2.09	1.00	2.76**	3.41**	1.95°		
42	イン		サークル関与意欲	297	2.03	1.07	319	2.09	1.23	23	2.09	1.24	—	—	—	
43			深い友人獲得	297	1.34	.55	319	1.48	.79	23	1.74	.75	2.58*	3.27**	—	
44			新友人獲得	297	1.60	.71	319	1.66	.87	23	1.87	.76	—	1.77°	—	
45		対先輩交流	296	1.61	.71	318	1.75	.86	23	2.09	.79	2.14*	3.05**	1.95°		
46		対後輩交流	296	1.90	.87	318	1.86	.92	23	2.13	.81	—	—	—		
47		対友人適応予想	295	2.21	.70	318	2.11	.75	23	2.35	.88	-1.71°	—	—		
48	イン	生き方確立意欲	296	1.80	.76	317	1.85	.89	23	1.61	.78	—	—	—		
49		対交流意欲	294	2.10	.83	317	2.18	.90	23	2.96	.88	—	4.72***	4.08***		
50		家族	294	1.95	.77	317	2.03	.81	23	2.78	.67	—	5.78***	5.15***		
51	全体的適応予想		294	2.32	.71	317	2.29	.72	23	2.65	1.03	—	2.09*	2.26*		
52	卒業進路明確度		301	2.42	1.21	322	2.58	1.29	23	3.09	1.35	1.65°	2.55*	1.82°		

注 \bar{x} (平均値)は高得点ほど消極的・人格非適応的反応であることを示す。
 °P<.10, *<.05, **<.01, ***<.001。—はn.s.。

要するに、A群は学業や公的制度的枠内の人間関係への関与度・関与意欲が強いが、学業へのそれは出席への積極的構えに起因するとみられ、他方、交友への意欲も強いが交友をめぐる不満・不安も存在するとみられるのである。また、家族との良好な関係とそれに基づくであろう卒業進路展望の明確さ、遊びへの弱い関与、生き方確立を回避しているかの如き傾向、等もA群の特質といえよう。これらの諸特徴をもった層が、間近に迫った期末試験に過剰適応的な多量の単位を取得することに成功するのである。

それではC(非適応)群の特質はどうだろうか。それは6項に整理できる。

- ① 変数番号1～5より、地域性と大学・学部・学科に対する不本意感の残存。ことに「再受験志向」(4)はこの時点になってはじめて予測要因として浮びあがるものであり、C群の得点は2.43と絶対的水準こそ“再受験はしたくない”に傾くものの、大学入試シーズンの現時点においてもまだ所属性を受容しきれていないことを示す。
- ② 変数番号6～8, 10, 11, 13, 22, 35, 36, 41より、教養部及び学部の講義に対する関心の弱さ、専門研究すなわち専攻への関心の弱さ、前期試験の失敗感などを軸とした学業一般に対する消極的・否定的構え。なお、専攻への弱い関心は前項でのべた不本意感の残存と密に関連しているであろう。
- ③ 変数番号13, 17, 40, 45より、対先輩・対教官といった縦の人間関係に対するかかわりのとりにくさ。これに次項でふれる対家族の障害も併せると、C群の〈縦不適応〉が如実に浮び上がる。
- ④ 対家族の全変数(19・20, 49・50)の結果から、家族との不良な関係と準拠困難。
- ⑤ 変数番号34・51より、これまでの不良なSA(総括的適応感)と今後への人格適応の見通しの作りにくさ。
- ⑥ 変数番号52より、不明確な卒業進路展望。

要するに、不本意入学感が残存し、大学講義及び専攻研究への関心も弱く学業一般への否定的構えをもち、かつ、家族・先輩・教師との間の縦の人間関係のとりにくさを示し、SAも人格非適応的であることが、間近に迫った期末試験への適応を困難にさせるのである。

(2) informalな大学適応の予測因

全52変数による逐次重回帰分析の結果、有意な標準偏回帰係数をもつ13変数が見出された(表10)。重相関係数は.560で十分に高いといえるが、これは、目的変数たる総取得単位数が決まる期末試験の直前1週間に実施した調査によるから当然ではあろう。

予測因の第一にあげられるのは、変数番号8・9・10にみるような、1年間の出席・語学予復習行動の不足と前期試験失敗感という、学業領域への関与の散漫さである。また、次年度の学業達成に楽観的展望(変数番号37「次年度対講義適応予想」)をもつほど総取得単位数は低下するから、〈学業領域へのかかわりのあまさ〉と括ってもよさそうである。

第二は交友領域への係わりのあり方であるが、変数番号16・24・45・46の結果は一見多義的である。即ち、1年間の交友への関与度(24)と次年度の対先輩交流意欲(45)とが総単位数をおし上げるのに対して、現在の友人数の多さ(16)と次年度の対先輩交流意欲(46)は逆に単位数を低下

させる。しかし有意水準や各変数の焦点のちがいを考慮すると次の仮説で説明できそうである。拡散的な幅広い交流と、縦の人間関係(対先輩や対家族)を好まず気楽な対後輩交流を好むことが、単位取得-学業達成を阻害するのに対して、交友の巾ではなく自我中核的な深い関与と縦の関係をいとなめ構えが、彼等からの学業情報の入手しやすさや彼等への準拠を媒介にする大学への社会化 college socialization 等を通じて、単位数をおし上げる、という仮説である。

第三の要因は、項目番号 49 にみる、対家族の良好な関係と準拠である。これは、前述の如く対先輩の意欲(46)と併せ、縦の人間関係への意欲として括れよう。

第四は、サークル活動や遊び・個人的趣味、アルバイト(23, 26, 27)への強い関与が単位数を低下させることである。これらに強く関与する文化は collegiate culture であって、学業達成を指向する academic culture に拮抗する文化であるから、それへの適応をみせるほど学業達成が阻害されることを示す。

第五は、1年間の生き方確立への関与が単位数を低下させることである。1年間の「苦闘」(積極的モラトリアム)が学業達成には結びつかなかった事を示す。

V 総合的考察

III~IV章では、入学直後、3ヶ月後、1年次終了時点という各時期ごとに、公的な過剰適応と非適応の予測因を指摘し、informal な大学適応の予測因を挙げてきたが、本章ではこの三時点間の予測因の変化や通時的特質を探ることで本研究の総括としたい。前章までで、公的な過剰適応及び公的な非適応の予測因として括られた諸項を、表11・12に一括した。変数レベルではなく項レベル(即ち、予測因レベル)で示したのは、差をみた変数が多いために変数レベルの表示が繁雑で、却って鳥瞰を阻むからである。表13には、重回帰分析によって有意な標準偏回帰係数をえた変数すべてを予測性の方向(+は総取得単位数を促進し-は抑制する)とともに示した。変数レベルで表示したのは、少数の変数で総取得単位数を説明・予測しようとした以上は、鳥瞰ではなく接視が望ましいからである。

表11~13はいずれも、一般的に生活空間領域として分化されやすいと思われる領域のちがいに沿ってまとめられた。領域としては、学業、クラブ・サークル、交友、その他の行動領域、家族、生き方や自己とのかかわり、進路及び進路先(現所属)とのかかわり、生活空間構造全体、がえら

表10 1年次終了時点反応による逐次重回帰分析

No	変数名	Std B	t 値
8.	対講義;出席度	+ .233	5.88***
9.	同上;語学予復習	+ .140	3.53***
11.	前期試験成功感	+ .276	6.98***
16.	友人数	- .142	3.07**
23.	関与度総括;サークル活動	- .096	2.40*
24.	同上;交友	+ .093	1.93°
25.	同上;生き方確立	- .090	2.39*
26.	同上;遊び	- .093	2.35*
27.	同上;アルバイト	- .082	2.25*
37.	次年度;対講義適応予想	- .126	3.32**
45.	同上;対先輩交流意欲	+ .230	3.95***
46.	同上;対後輩交流意欲	- .101	1.73°
49.	同上;対家族交流意欲	+ .091	2.33*

df = (13, 550) F = 18.83***
multiple R = .560 R² = .313

°P < .10, ** < .05, *** < .01, **** < .001

ばれた。このうち、「クラブ・サークル」領域については、高校期のクラブ領域は客観的には公的・制度的活動の領域であり、大学期のクラブ・サークルは大学の教育目標とはまったく無関係の純然たる informal 領域であることに注意されたい。

(1) 公的な大学適応の予測因

過剰適応予測因（表11参照）：三時点のすべてで、学業への強い関与が過剰適応を予測するといえる。しかし前章までに述べたように予測性の強い学業行動は、高校期でこそ「学業自体」への関与であるが、大学入学後は高い出席行動が過剰適応を特徴づける。

クラブ・サークル・交友といった大学での informal な行動領域については、入学3ヶ月後までの強い関与・意欲が過剰適応を予測させ易いが、1年間の総括になると過剰適応との関連が弱化し、交友に関しては逆に幅の狭さが残りそのために次年度への拡大意欲が強くあらわれていく。即ち、1年前期迄のサークルや交友の自我中核的な定位と、その後の中核性の弱まり・拡散化、が過剰適応を予測することになる。また、前章にふれた如く、「その後」の過程には、交友領域での不安全感や不安が潜在するかもしれない。

学業と informal な領域との双方に関わるものとして、対教官や研究室での交流、即ち、公的制度的枠内での交流意欲が、1年終了時になってはじめて過剰適応群の特徴になってくる。反面、遊び・趣味への関与が弱いことが、入学直後と1年終了時の二時点で過剰適応を予測させる。

他、家族との良好な関係、自己嫌悪、生き方確立への弱心、明確な卒業イメージなども、三時点のうち二時点で過剰適応を予測させる。このうち生き方に関しては、入学3ヶ月になってはじめて予測因として登場するものである。

これらを総合すると次のような像がえられる。即ち、入学直後から既に、《公的要請や期待に対する適応の構え》を明確にもち、家族との関係も良好で進学目的や卒業展望も明確、交友意欲も強いのだが、このようないわば素直で明るい特徴の背後に自己嫌悪が潜んでいてその補償と、公的期待への適応の構え及び、良好な対家族関係から示唆される、家族の期待に沿う構えによって年間を通じて良好な出席を示す。個人的遊びや趣味への関与は弱く、入学頭初意欲していた交友も結局は巾の狭いものにとどまり、1年末には次年度の公的制度的枠内での交流を志向する構えが生ずる。これらから公的制度的枠内での満足・安定という要因が抽出できそうである。他方、明確な進学目的と明確な卒業イメージにあたかも安住するが如く、次第に生き方確立への弱い関心があらわになり、生き方確立を回避して卒業展望を早々と作りあげた観を呈する。

かかるいわば表層的な安定と満足、早期完了、出席重視の学業領域、は入学後3ヶ月時点までに強く関わったサークル・交友からえられた「支え集団」と、同じくこの時点までに形成された他群に比べ良好な大学本意感（この背景には入学直後に示された「明確な目的・卒業イメージ」にそった大学選択があったであろう）、そして良好な家族との関係などから下支えをうけていくかのようである。

このような生活体制が、「2年間で36単位」という一般教育科目に関する公的期待をはるかに越える過剰適応をもたらしていく。

非適応予測因（表12参照）：三時点いずれにおいても一貫して、学業への消極的否定的なかかわりが公的な大学非適応を予測する。ことに、入学3ヶ月までの講義に「ついていけた」との感覚と、

表11 公的過剰適応の予測因の変遷

領 域	生 活 体 制		
	入学直後まで	夏休み直前まで	1年次終了時まで
学 業	高校期学業への強い関与。	出席を中心とした学業への強い関与。	高い出席度を中心とした強い関与。 次年度の専攻への意欲。
クラブ・サークル 交 友	高校期クラブへの強い関与。 高・大学での交友への強い意欲。	サークル・交友への強い関与とそれによる支え。 今後への意欲。	巾の狭さとそれに基く拡大への意欲。
他	高校期遊びへの弱い関与。		公的制度的枠内でのかわりへの意欲。 遊びへの弱い関与。
家 族	良好な関係と準拠。		密な関係。
生き方・自己	自己嫌悪。(補償による学業への意欲?)	生き方確立への弱い関心。(回避?)	自己嫌悪。(補償→学業)
進路・不本意感	明確な進学目的, 卒後イメージ。(早期完了)	大学・学部への満足感。	明確な卒後イメージ。
全 体	公的要請への適応の構え。	支え集団の発見。 満足・安定ゆえの生き方への関心弱化。	

表12 公的非適応の予測因の変遷

領 域	生 活 体 制		
	入学直後まで	夏休み直前まで	1年次終了時まで
学 業	高・大学を通じた消極的構え。	講義の理解困難と予復習なし。	教養・学部双方の学業へ研究への消極的構え。
クラブ・サークル 交 友	高校期交友への弱い関与。	これまでの弱い関与と今後への弱い意欲。	縦の人間関係(対教師・先輩)のとりにくさ。
他	遊びを中核にした高校期。		
家 族	疎い交流と準拠困難。		
生き方・自己		生き方確立への関心と、 生き方の明確化。	
進路・不本意感	無目的進学。 偏差値重視の選択。		
	大学不本意感。	総合的な(地域, 大学・学部・学科)不本意感。	再受験志向。
	不明確な卒後イメージ。		
全 体	不良な人格適応感。	生き方と学業・卒後イメージの間の弱い関連。	不良な人格適応感。 「縦不適応」。
		今後の人格適応達成展望のえにくさ。	

IV章で数値をあげて指摘した語学予復習を殆んどやらない学業行動の決定的不足・散漫さが、あたかも臨界期の初期体験のように効いてくる。そして1年終了時には、学業・研究全般への意欲減退にまで汎化して公的非適応をもたらすことになる。土川ら(1978)は名古屋大学留年学生の調査によって教養部留年者の主観的留年理由の第2位として「勉学の意欲をなくした」ことを見出している¹⁰⁾がそれに一致した結果といえよう。

交友・サークルには入学3ヶ月までに関与の弱さと今後への意欲の乏しさがあらわれ、1年終了時には、縦の人間関係のとりにくさが顕在化する。対家族の交流・準拠は入学直後から一貫して不良であり、家族との関係のとりにくさが縦関係一般へと汎化している如きである。土川らの見出した「クラブ活動への時間のかけ過ぎ」という要因¹¹⁾はここでは認められない。

進路・所属に関しては、無目的進学・偏差値重視という「入れるところに入った」徴候に加え、大学への不本意感を入学直後から抱き、それが次第に、学部・学科・地域への不本意感に拡がっていき、1年次末には再受験志向が他群に比べ強くなる。一貫して卒後イメージは不明確であり、ほぼ一貫して人格非適応も強く、入学3ヶ月後以降は今後の学生生活全体に対して人格適応的・楽観的な見通しをえにくくなる。

他方、入学直後も3ヶ月後も生き方確立への関心を強く示し、他群に比べ明確な生き方を確立していくが、この確立された生き方は、学業に指向してもいないし、卒後進路展望に結びついているわけでもないようである。「生き方」確立を入学後の「苦闘」の中で進めたものの、見出された「生き方」が現所属では貫徹できないと捉えて不本意感や再受験志向を強めていくのかもしれない。

(2) informal な大学適応の予測因

表13に抽出された全変数を予測性の方向とともにまとめた。適応への変数の機能は総取得単位数に対して両方向性をもつが、以下の論述はプラスの方向性のみをとりあげている。マイナスの方向性に注目すると逆の論述になるがそれは省略する。

学業については三時点のいずれにおいても出席に関する変数が一貫して取得単位数をおしあげ、更に、入学3ヶ月後の「対講義適応感」と1年末の「語学予復習」から示唆されるように、出席行動以外の、理解度(への自信)や予復習行動といった要素を次第に備えていくことが単位数をおし上げていく。しかしその一方で、入学3ヶ月後の「専門準備度」、1年末の「次年度講義適応予想」からは、次の学年次(即ち、学部期)の課題に1年次では目配りをしないことが必要らしく思われるし、後者(「適応予想」)からは、ついていけぬのではないかという不安が出席行動を動機づけている可能性すら看取される。

クラブ・サークルの領域では、「高校期クラブ」と「大学サークル」の予測方向が逆になっているが、高校クラブは学業と同じ高校組織の公的制度的活動であって、高校学業への関与と併わせ高校期の公的・制度的活動への強い関与がプラス機能をもつと括るべきであろう。従ってここで注目されるのは大学サークルへの弱い関与がプラス機能をもつことである。土川ら(1978)は教養部留年生における留年理由の第一位にサークルへの過剰関与を見出した¹¹⁾が、それと同様の結果である。

交友領域では、高校・大学一貫して交友への強い関与が単位数をおし上げている。しかし、入学後1年間でえた友人数はむしろ多くない方がよい。拡散的でなく、比較的小人数の友人との交友に

強く関与していくことが単位数にプラスの機能をもつようである。更に1年末に対先輩交流という縦の人間関係へ下位者としてかかわることに積極的構えを示すほど、逆に、同時期に対後輩交流という、気楽で自分が主導的にかかわれるであろう関係への意欲が弱いほど、単位数はおし上げられ、この点、藤井ら(1975)が留年者において非留年者に比べ non-submissiveness (支配性)が高いことを見出したことに符合しよう。要するに、交友領域では、拡散をさけ「気楽な支配性」を好まず、強く関与していく構えと、1年末までに縦の人間関係に下位者としてはいっていきける態制を作れることが、単位数にプラスの機能を果すのである。

家族との交流意欲もほぼ年間を通じてプラス機能をもつ。

生き方・自己観の領域では、まず生き方確立への関心・関与を回避またはひきあげることが単位数をおしあげている。生き方確立の「苦闘」(積極的モラトリアム)は単位からみた大学適応にとって、ほぼつねに、避けるべきことのようなのである。次に、自己を肯定しきれないこと(自己嫌悪)もほぼつねに、単位数をおしあげている。確立された自己であるか否かは別として、自己を受容しきれぬ不調和感が補償の機制を通して学業行動を動機づけると思われる。これと類似の機制を推定できるのが、入学直後の大学・学部への不本意感による単位数上昇現象であろう。入学直後の不本意

表13 総取得単位数(informalな大学適応)の予測変数の変遷

領 域	予 測 変 数		
	入 学 直 後	入 学 3 ヶ 月 後	1 年 次 終 了 時 点
学 業	高校学業への関与度 (+)		
	講義出席意欲 (+)	対講義一出席度 (+) 対講義・適応感 (+) 専門準備度 (-)	語学予復習 (+) 前期試験成功感 (+) 次年度講義適応予想 (-)
高校クラブ	高校・クラブ関与度 (+)		
大学サークル	大学サークル関与意欲 (-)		関与度総括・サークル (-)
交 友	高校・交友関与度 (+)		友人数 (-) 関与度総括・交友 (+) 次年度対先輩交流意欲(+) " 対後輩 " (-)
他	高校・遊び関与度 (-)		関与度総括・遊び (-) 同 上 ・アルバイト (-)
家 族	交 流 意 欲 (+)		交 流 意 欲 (+)
生き方・自己	高校・生き方確立への関与度 (-)	生き方・考える時間 (-)	関与度総括・生き方 (-) 確立
	自己肯定 (-)		
進 路	適性 vs 偏差値 (+)		
	大学満足感 (-)		
	学部満足感 (-)		

注 (+) 総取得単位数に順機能的予測性をもつ。
(-) " に抑制的・逆機能的予測性をもつ。

感が学業達成のエネルギーになるかの如くである。但し、入学3ヶ月後および1年次末には不本意感が単位数に果す機能は弱まっていく。

他、偏差値よりも適性を重視した進学進路選択や、高校・大学期を通しての個人的遊びへの弱い関与、入学後1年間のアルバイトに対する弱い関与もプラスの機能を果していく。

結 び

本稿では、大学生の適応状況に影響を及ぼす入試制度の変動には左右されていない、安定期の大学生に対して、入学直後・夏休み直前・教養部（1年制）終了直前の三時点で実施した生活体制・生活空間構造を問う質問紙調査への反応と、1年間の取得単位数との関連から、大学への社会-文化適応の予測因としての生活体制が探られた。予測因の探索に先立って、大学への社会-文化適応の指標として何が適切であるかを、学業達成に関する大学の公的規範の検討と、質問紙調査への反応に基く、学業をめぐる学生文化の分析とによって明らかにし、学業をめぐる公的な大学適応の指標に一般教育科目単位数、informalな大学適応の測度に学部・学科ごとに標準得点化した総取得単位数が、それぞれ選定された。

公的な適応に関しては、明確な分割点が存在し、過剰適応・適応・非適応の三群がえられるために、過剰適応と非適応群の他群に比べた特徴が予測因として括り出され、informalな適応に関しては連続変数として取扱うのが望ましいために、総単位数を目的変数とした逐次重回帰分析で抽出された変数をもとに予測因が考察された。見出された予測因に関する総括はV章の3表(表11~13)及びV章の論述の通りである。以下、本研究の今後の展開方向を述べることで結びとしたい。

第一の方向は、従来の大学適応や留年の研究においては軽視されてきた大学文化・教官文化・学生文化に対する社会心理学的アプローチの充実である。

第二の方向は、より実践的に、留年予測因の分析に進むことであり、本研究の対象コホートには4年次まで計6回の質問紙調査が実施済で、しかもストレートの進級者は昭和62年3月に卒業しており既に卒業留年の有無は決定しているから、この方向の展開は容易であって、第1報(豊嶋 1988)が既発表である。

展開方向の第三は、異なるコホートの資料によって、変動しにくい予測因を確定するという方向である。事実、鳴沢(1978)は留年予測因の大数的研究によって、また我々(豊嶋ほか 1987)も総括的適応感予測因の大数的探索にさいして、予測因がコホートによって異なることを見出している。本稿で指摘された予測因は、有意な変数の個別的意味づけによってではなく、その指示する領域に基いて変数群をまとめあげた上で統合的な意味づけを行なった所産であるから、コホートによる変数レベルの変動に対しては相対的に堅固と思われるものの、異なるコホートでの追試が必須であろう。但しその際には入試制度安定期のコホートを選定することが望まれる。

註

- 1) 本誌第4号から第7号(1979～1983)の同題の研究論文I～Vとしてまとめてある。
- 2) 前掲論文のための第一次分析と、原著論文としては未発表のデータは、このタイトルの下、計10報の学会発表を行なった。東北心理学会(第31～34回;1977～1980,第38回,1984)で初報～3報,5報,10報を,日本心理学会(第44・45回;1980・1981)で4・6報,日本社会心理学(第23～25回;1982～1984)で7～9報。
- 3) 全国学生相談研究会議では第13回シンポジウム(1980)以来、「共通一次」後の学生の変化やそれ以降の変容をテーマとした研究を行なってきた。
- 4) この点は豊嶋(1981)に詳しい。
- 5) 弘前大学教養部履修内規による。
- 6) 教養部発行の「履修案内」に明示されている。
- 7) 1960年代末の国立大学教養部における大量留年現象が社会問題化の契機であった(宮沢 1988)。
- 8) 前出の全国学生相談研究会議の初期からの研究テーマであった(安藤 1988)。
- 9) 大学精神衛生研究会議では,第1回研究会(1980)以来,「休・退学・留年学生研究班」によって逐次発表がなされている。
- 10) 17.6%。但し,この数値は193名の教養留年者のうち34名の回答者に対する%であり,実数は6名である。
- 11) 20.6%。実数7名。

文 献

1. 安倍淳吉 1969, 社会心理学研究法, 北村 他編「心理学研究法」 誠信書房, 463-493.
2. 安藤延男 1981, 留年, 遠藤編「アイデンティティの心理学」 ナカニシヤ出版, 215-234.
3. 安藤延男, 園田五郎(編) 1982, 「大学生の原級残留に関する研究と対策—九州大学教養部での10年間の歩み—」 九州大学教養部.
4. 安藤延男, 1988, 九州大学教養部の留年対策—その歩みをかえりみて, 大学と学生 269, 23-28.
5. Clark, B.R. & Trow, M. 1966, The organizational context, Newcomb, T.M. et al, eds. "College Peer Group" Aldine, 17-70.
6. 藤井 虔・古賀一男 1975, 卒業留年に関する研究(I), 京都大学学生懇話室紀要, 5, 55-75.
7. 同上 1977, 卒業留年に関する研究(II), 京都大学学生懇話室紀要, 7, 58-65.
8. 石井完一郎 1981, 現代の若者における意欲減退とシラケをかえりみて, 石井編「現代のエスプリ 167・スチューデント・アパシー」 至文堂, 221-231.
9. 人事院職員局健康安全法令研究会(監) 1986, 職場のメンタルヘルスマネジメント—管理監督者のところえ—, 同会監「公務員健康安全法令集(昭和61年度版)」, 1069-1086.
10. 倉石精一 1968, 留年—その実態と問題点, 厚生補導 22, 2-9.
11. 黒田正典・細江達郎 1976, 東北大学における留年の一考察, 東北大学学生相談所紀要 3, 1-8.
12. Marton, R.K. 1957, Manifest and latent functions, Marton "Social Theory and Social Structure (revised and enlarged edition)" Free Press, 19-84.
13. 宮沢秀次 1988, 留年, 西平他編「青年心理学ハンドブック」福村出版
14. 嶋沢 実 1978, 留年は予測できるか 学生相談室レポート(東京都立大学) 6, 54-71.
15. 西平直喜, 久世通雄(編) 1988, 「青年心理学ハンドブック」 福村出版.
16. 佐藤 怜 1987, 大学入学試験成績に関する考察, 東北学院大学教育研究所紀要 6, 41-66.

17. 下田節夫 1983, 共通一次学生の問題, 第16回全国学生相談研究会議報告書, 109-113.
18. 舩中 達 1971, 教養課程留年と卒業遅延, 京都大学学生懇話室紀要 1, 42-53.
19. 舩中 達・藤井 虔 1976, 修学指導に関する諸問題, 厚生補導 119, 10-22.
20. 田中国夫 1983, 学生文化と大学生, 関 他編「大学生の心理」, 有斐閣, 221-240.
21. 土川隆史・丸井文男 1978, 大学生の留年の実態とその要因の分析, 「大学生の留年の実態とその要因の分析および指導法に関する研究」名古屋大学学生相談室, 1-20.
22. 豊嶋秋彦 1981, グループ効果に対する社会心理学的接近—グループ体験のもつ人格—社会間の適応促進的機能をめぐって—, 佐治 他編「グループ・アプローチの展開」誠信書房, 39-55.
23. 同上 1984, 新入試制度後の学生像と大学教育・学生相談, 第17回全国学生相談研究会議報告書, 83-85.
24. 同上 1985, <新入試制度後の学生像>再考, 第18回全国学生相談研究会議報告書, 124-129.
25. 同上 1987, 「大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究」(昭和61年度文部省科学研究費補助金(一般(C))研究成果報告書).
26. 同上 1988, 卒業留年の予測因としての1年次の生活体制(1)—1年終了時の生活体制を中心に, 第26回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会報告書(印刷中).
27. 豊嶋秋彦・清 俊夫 1980, 入試制度の変容前後における大学新入生の適応状況, 第13回全国学生相談研究会議報告書, 11-14.
28. 同上 1983, 新入試制度に伴う4年次学生の適応の変容と同化の諸相, 第16回全国学生相談研究会議報告書, 29-34.
29. 豊嶋秋彦・清 俊夫・芳野晴男 1980, 大学新入生における適応状況と適応過程(Ⅱ)—共通出席者における適応の状況と適応の予測因をめぐって, 弘前大学保健管理概要 5別冊, 1-51.
30. 同上 1981, 大学新入生における適応状況と適応過程(Ⅲ)—入試制度改訂に伴う適応の変容と同化の諸相, 弘前大学保健管理概要 5, 1-41.
31. 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫 1983, 大学新入生における適応状況と適応過程(V)—入試制度改訂後における7月から2月に至る適応過程の予測因, 弘前大学保健管理概要 7, 1-41.
32. 豊嶋秋彦・細川 徹・芳野晴男・清 俊夫 1987, 大学生における適応過程の時代的変遷(6)—適応予測因としての受験期～入学直後の生活空間構造; 1977-1986, 東北心理学研究 37, 106-107.

付：資料

入学3ヶ月後調査の変数一覧

- | | |
|--|--------------|
| 1. 教養部の講義を全体として評価すると、面白かったですか。 | (対講義一魅力度) |
| 2. " " , ついていけましたか。 | (" - 適応感) |
| 3. 出席は全体としてどうでしたか。 | (" - 出席度) |
| 4. 語学授業の予習・復習は、どのくらいやりましたか。 | (" - 語学予復習) |
| 5. 専門の研究や準備を、これまで、どのくらいやりましたか。 | (専門準備度) |
| 6. 教官との交流はありましたか。 | (対教官交流度) |
| 7. 大学での友人をこれまで積極的に求めてきましたか。 | (対友人一積極性) |
| 8. 大学での友人は多いですか。 | (友人数) |
| 9. 大学の上級生・先輩との交流はありますか。 | (対先輩交流度) |
| 10. 友人関係は全体としてうまくいっていますか。 | (対友人適応感) |
| 11. 家族との関係は、うまくいっていますか。 | (対家族適応感) |
| 12. " , 密だったですか。 | (対家族交流度) |
| 13. 入学したころ「学生生活で力を入れたい」と思っていたことは、
これまで十分にやれましたか。 | (目標活動実現度) |
| 入学後これまで、次のような活動にどのくらい力を入れてきましたか。 (7月までの関与度総括) | |
| 14. 出席それ自体や試験準備など、単位をとるための活動。 | (出席行動) |
| 15. 勉学それ自体。 | (学業自体) |
| 16. サークル・クラブ活動や寮・クラス活動などの自治的集団活動。 | (サークル活動) |
| 17. 交友。 | (交友) |
| 18. 生き方・考え方など人生観・人生指針に関すること。 | (生き方確立) |
| 19. 遊び・趣味。 | (遊び) |
| 20. アルバイト。 | (アルバイト) |
| 人生観・人生指針・自分なりの生き方や考え方など、生きる指針となるものについておききします。 | (生き方・人生指針) |
| 21. これまで、そうしたものを考える時間がとれましたか。 | (考える時間) |
| 22. そうした指針をすでに作りあげていますか。 | (明確度) |
| 23. 自分の性格や行動の仕方(行動傾向)を含め、「自分がどういう人間であるか」を、これまで、充分「かえりみる」ことができましたか。 | (自己省察) |
| 24. 「かえりみた」結果、そういう自分を好きですか。 | (自己肯定) |
| 25. 弘前大学に入学したことを、今あなたはどのように思っていますか。 | (所属満足感一大学) |
| 26. この学部に入ったことについてはどう思っていますか。 | (" - 学部) |
| 27. この学科(課程・学科・コース)についてはどう思っていますか。 | (" - 学科) |
| 28. 現在、他の大学や他学部・科にもう一度受験しなおしたいと思いませんか。 | (再受験志向) |
| 29. 弘前という街にいることについてどう思っていますか。 | (地域への満足感) |

30. これまで、今後の学生生活を送るうえでささえとなるような人・集団を見出せましたか。 (支えの発見)
31. 入学後これまでの生活に全体として「生きがい」や「充実感」を感じていますか。 (充 実 感)
32. 要するに入学してこれまでの学生生活は、全体として、うまくいっていますか。 (SA：総括的適応感)
- これからの教養部生活について
33. 学業への意欲はありますか。 (学業一般への意欲)
34. 講義への出席意欲は、 (講 義 へ の 意 欲)
35. 前期試験には自信がありますか。 (前期試験への自信)
36. 専門の研究や準備を1年の時点でやりたいですか。 (専 門 へ の 意 欲)
37. サークル・クラブ活動への意欲は、 (サークル活動意欲)
38. 交友関係への意欲は、 (交 友 意 欲)
39. 深く対話できる友人とのかかわりを持ちたいですか。 (深い友人獲得意欲)
40. 自分を見つめたり、人生観・生き方を確立していくことを、やりたいですか。 (生き方確立意欲)
41. 今後のあなたの学生生活を全体として予想すると、うまくいきそうですか。 (全体的適応予想)
42. 卒業後の進路はすでに決めていますか。 (卒後進路明確度)

注 1. ()内は、本文中で使用した変数名。

2. すべて五段階評定項目。消極的・人格非適応的反応ほど高得点になる。最も消極的反応が5点、最も積極的反応が1点である。

入学直後調査および1年次終了時調査の変数一覧は、豊嶋(1987)「大学生における適応の構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究：昭和61年度文部省科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書」p 31-34を参照されたい。

正 誤 表

誤	正
12頁上から15行目 . 342	. 349
47頁下から12行目(看護過程3,4年)	(看護課程3,4年)
49頁上から16行目 入学試験	入学志願
82頁 学生表中 耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉疾患
82頁 職員表中 耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉疾患
83頁 表中内容覧上から16行目第1回目	右の備考欄に移動
101頁 学生表中 耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉疾患
101頁 職員表中 耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉疾患